

令和4年度仙台市発達障害者支援地域協議会作業部会の概要について（中間報告）

- 1 テーマ 「成人期の自立を実現するために必要な支援やネットワークのあり方について」
- 2 委員について 上記テーマに応じて、会長が指名する協議会委員及び臨時委員を下記の通り選任。

	氏名	よみがな	所属
1	★植木田 潤	うえきだ じゅん	宮城教育大学教職大学院 教授
2	副部長 佐々木 健太郎	ささき けんたろう	尚綱学院大学 心理・教育学群学校教育学類 講師
3	★畔柳 清美	くろやなぎ きよみ	就労移行・定着支援事業所オルタ八乙女 所長
4	齋藤 涼平	さいとう りょうへい	仙台市障害者就労支援センター 主任支援員
5	★上西 創	かみにし はじめ	仙台南高等学校 スクールカウンセラー
6	増山 裕子	ますやま ゆうこ	宮城県立貞山高校 通級担当
7	伊藤 雄高	いとう ゆたか	NPO法人アスイク ユニットリーダー・コーディネーター
8	★斎藤 純子	さいとう じゅんこ	榴岡児童館 館長
9	★猪股 絵理子	いのまた えりこ	保護者
10	西田 有吾	にしだ ゆうご	仙台市自閉症児者相談センター 主任相談員

★の委員は協議会委員

3 議論の経過について

令和3年度は下記のとおり、2回の作業部会を実施。

【第1回】（令和4年1月25日開催）

・各委員から、現在の所属での現状をご報告いただき、成人期の自立に向けて必要な関わりや社会資源についてのご意見をいただいた。

・また、これまで当センターで「発達障害児者の地域生活の充実」について検討してきた経過として、平成26・27年度に作成した提言書「発達障害児者の地域生活の充実へ向けた支援体制の整備について」の内容について共有した。提言書には、「発達障害児者が地域の中で自立して暮らす力を身に着ける」ために必要な力として、「くらす」「はたらく」「たのしむ」の三つの観点が示されており、今後の作業部会では、これらの知見を踏まえながら検討を進めていくことを確認した。（資料2-1）

【第2回】（令和4年3月24日開催）

・（資料2-2）第1回で委員から頂いたご意見から、成人期の自立に向けて大切なこととして「安心できる関係づくり」「学齢期からの生活の土台作り」「情報のアクセスしやすさ」「具体的な経験の積み重ねと振り返り」の4つの項目が抽出された。それらを含む視点として、「支援の垣根を越え、本人に必要な体験の機会を皆で協力して作ること」が得られた。これらの視点は、アーチルで実施した各関係機関からのヒアリング調査で得られた結果とも合致しており、仙台市の発達障害児者支援に通底する視点であるとの確認がなされた。

・（資料2-3、2-4）また、現在本市にある社会資源の洗い出しを行うため、ある一つの社会資源の中に、「暮らす」「働く」「楽しむ」の3つの機能がどの程度含まれるかという観点から図の中にプロットした。また、いわゆるグレーゾーンの発達障害児者が利用できる社会資源について明らかにするため、人型のマグネットを図に張り付けて明示した。これらの作業を各委員がともに行いながら、今後本人が成人期の自立に向けて体験していけるとよいことや、必要とされる環境についての意見交換を行った。

・各委員より、「学齢期から成人期へとライフステージが変わっても、場や人とつながっていること」の大切さについて言及があった。そのために必要なこととして、「支援機関同士が他ライフステージの社会資源を知るツールが整備されていること」が挙げられた。しかし同時に、本人にそういった社会資源を情報提供しても、「そもそも人への慣れにくさがある方がわざわざ相談できる場に行って相

談するのはハードルが高い」との指摘もなされた。そのため、「一番身近なコミュニティの中に日頃からのつながりの中で、いざ困った時に相談できたりつながれたりする場があると良い」との意見が出されたが、一方で「中高生以降は地域とのつながりが薄くなることが多い」との指摘もあった。

・高校の取組みとして、校内カフェを作る取組みや、ふれあい広場サテライトでの取組みについて情報提供があり、居場所として好きなように自然体で過ごす中で、少しずつ人との関係を作っていくことができるようになるとの話があった。しかし、就職後、仕事終わりや休日等に気軽に立ち寄れる居場所がなくなる（自ら積極的につながりを見つけるしかない）との指摘もあり、「自分以外の人がいて安心できる場」でなおかつ「他の社会資源とのハブになるような場」が成人期にもあるとよいとの意見が出された。

・具体的な場のあり方として、本人が様々な状態像であっても利用できるように、「一人で楽しむ」→「隣に人がいる中で場を共有しながら一人で楽しむ」→「人と一緒に協力して楽しむ」といういずれの段階の方でもその場に居ることができると良い、という意見があった。

・また、近年は SNS やオンラインゲーム等で自己肯定感を得たり、社会性を身に着けるきっかけとなっているケースも多く、バーチャルなネットワークの可能性についての報告がなされた。また同時にその危険性についても指摘があり、SNS 等の利用の仕方についても小学生の内から教育していく必要があるとの意見があった。

・以上を踏まえると、今後は、余暇活動などの「楽しむ」ことを通して安心して過ごせる場が各地域の中に内包され、そういった場が分野とライフステージを超えて乗り入れてつながり、様々な社会資源につながっていくためのハブとしての機能を持つていけるとよいとの意見が出された。

・いずれにしても、ライフステージが変わっても「人」と「場」のつながりが保てるような仕組み作りが必要であると共有された。

4 今後のスケジュール等について

今後、作業部会を3回程度実施し、第2回協議会本会にて最終報告を行う予定。

仙台市において必要とされる取組みのあり方についてさらに議論を深め、イメージを共有し、取組みとしてより具体化する予定。